



# なつのくも



本校ホームページ  
携帯・スマホ用サイト  
でもご覧ください。

第139号 (R3. 4. 6)

練馬区立光が丘夏の雲小学校

## 命の尊さ 思うとき 見える世界は色鮮やかかなり

校長 牧野光洋

春爛漫 あちこちで花の蕾がほころび目に映る色彩がどんどん鮮やかになっていく季節を迎えました。3月に71名の卒業生を送り出し、新たに男子40名、女子55



名合計95名の新入生を迎えます。私たちを取り巻く社会が忙しい中、命の尊さを思うとき、自然界はより鮮やかに移ります。この春空の中、お花見等も思うように出来ない状態ですが、外をのぞいてみてください。どこまでも透き通るような空の青。地表から伸びる太い幹の茶色。細い枝には

緑の芽。その間を埋めるように舞い散る花びらの薄桃色。庭先には、冬に植えた苗が一斉に伸び、赤や黄色等々が目に飛び込んできます。心一つで世界はより鮮やかに、味わい深く映るのです。さあ、年度も変わりました。花吹雪を追い風に今年度もスタートです。



このような詩があります。

「起き上がり小法師は、なぜ起きる？ 尻に重りの石（意思）が有る。」

冬場の縁日などでは達磨さんが売られていることが多いようですが、今の時節では縁日もなくなり、露天商で買い求めることも難しいかもしれません。この達磨さん、七転び八起きと言って何度転がしても起き上がるように細工がされています。その細工とは、達磨さんの底部に石の重りが入っているから起き上がってきます。このような当たり前の理屈に苦しみ多き人生を重ね合わせたこの詩の作者は、きっと温かい心の持ち主なのでしょう。賛嘆せずには居れません。中身が空っぽの達磨さんは、倒されれば倒れたままで、起き上がりません。底に石の重りが備えられた達磨さんだけが何度でも起き上がります。昨今、私たちを取り巻く社会にあって、我慢を強いられ、病と闘い、悲しみや苦しみの多い世界に生きている私たちも同じです。腹の底に石（意思）をしっかりと備えている者だけが、起き上がることができるのかもしれませんが。この詩の作者は、「どんなに今、苦しくとも、腹の底に意思さえもてれば、必ず起き上がるができる。」と私たちを勇気付けてくれています。換言すると、「やり直しや起き上がりの途中で、気持ちがめげてしまうこと、力強い意志が無くなってしまふことが、一番怖いことだ。」と言っているようです。やる気を持ち続ける「ゆとり」と「元気」を失わないこと「いざという時のために心を用い、いざという時が無いように努力する。」これこそが新たな令和3年度のスタートに必要なかと思えます。保護者の皆様、地域の皆様のご支援、ご助力を賜りまして、教職員一同、心を合わせて子供たちの指導に取り組んでいきます。どうぞよろしくお願いいたします。

だ る ま

